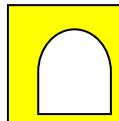


日吉台地下壕保存の会会報



第132号
日吉台地下壕保存の会

第21回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会 「今こそ戦争遺跡を平和のために」 参加報告

副会長 亀岡敦子

熱いよさこい祭りが終わってもなお暑い日差しの四国高知で、2017年8月19日(土)～21日(月)「第21回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会」が開かれました。会場の県民文化ホールは高知城を見上げる中心地にあり、全国からと地元からの参加者は約300人の盛会でした。

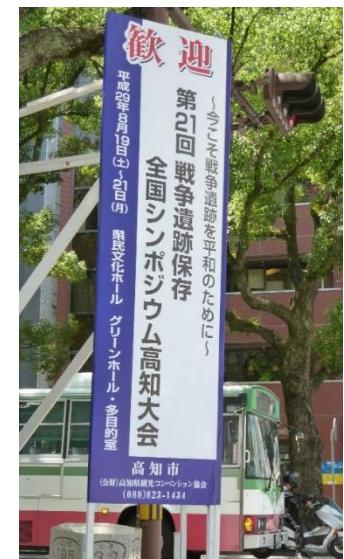
(1) 8月19日 全体会 県民文化ホールグリーンホール

午後から、ホールで全体会が開かれ、実行委員長岡村正弘氏の歓迎の言葉に続いて、高知近代史研究会会长である公文 豪氏による記念講演「植木枝盛憲法草案と日本国憲法」が行われました。氏は植木枝盛をはじめとする地元高知の自由民権運動を調査研究しており、すでに幕末から心ある人々が「るべき国家のかたちと人々の生き方」模索していたかを、丁寧に話されました。

次に十菱駿武共同代表の基調報告「日本の戦争遺跡の調査研究と保存 2017」があり、参加者は日本の戦跡保存の現実を知りました。全国で戦跡は約5万箇所あるが、経年と都市再開発から解体消失する戦跡も少なくありません。それに対する調査研究と保存公開運動の両面からの働きかけが重要であると強調されました。

続いての地域報告は、「豊川海軍工廠跡地保存の経過」として伊藤泰正氏の、1996年に「豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会」発会から、現在に至る報告がありました。2009年には「戦跡保存に市として取り組む方向」に決まり、2017年8月の時点で公園と資料館建設工事進行中であることです。

また、高知の出原恵三氏からは、「高知の戦争遺跡と旧歩兵第44連隊の弾薬庫・講堂」と題する報告がありました。その内容は、1990年代から「平和資料館・草の家」を中心に活動が始まり、活発な活動をしていますが、高知大学に残る2棟の建物の存続が差し迫った課題であることなどでした。初日のお楽しみである交流会は、高知の美味しい料理とともに、一年に一度会う仲間との嬉しい交流の場でもあります。



目次

<u>報告</u>	：第21回戦争遺跡全国シンポジウム高知大会報告	1-2p
<u>高知大会・第三分科会報告</u>		
☆日吉台地下壕関連戦争体験者への聞き取り	..	2-5p
☆ポートランドのわフカ地下壕とナチスのリセプション	プロジェクト	5-6p
<u>高知大会・フィールドワーク</u>		
☆Aコース：前浜掩体と耐弾式通信所見学に参加して	7-8p	
☆Bコース：旧歩兵第44連隊弾薬庫他参加報告	9p	
<u>拡大ガイド学習会報告再録</u>		
☆北条で勤務の頃	9-11p	
☆軍令部第三部が使用したチャペルについて	11-14p	
☆大和出撃から見た海軍燃料事情（極限の油断）	14-17p	
<u>寄稿</u>	☆日吉台地下壕が「要請講座」を受講して	18-19p
☆夏休み見学会を終えて	19p	
<u>連載</u>	地下壕設備アレコレ(19) 第三〇〇設営隊戦時日誌	20-21p
<u>ご案内</u>	☆戦跡をめぐるバスツアー	21p
☆2018年度ガイド養成講座	22p	
<u>報告</u>	港北図書館でパネル展&講演会を開催	23p
<u>お知らせ</u>	第25回横浜・川崎平和のための戦争展	24p
<u>活動の記録</u>	(6~10月)	25p

(2) 8月20日 分科会・閉会集会 多目的室

全国大会の重要なプログラムは2日目の分科会報告（下記）です。全国の取り組みを知ることが出来る、有意義な一日となります。

分科会に関しては、様々な意見がありますが、これだけ多彩な報告があるのだから、更に内容を深めることで、戦跡保存運動も認知度があがり文化財指定の後押しになるのではないかと思われます。

最後に、大会アピール「今こそ戦争遺跡を平和のために」が読み上げられ、来年2018年の夏には愛知県豊川で会うことを約束して、またそれぞれの活動に戻りました。

第21回高知大会分科会レポート一覧			
【第1分科会（保存活動の現状と課題）】			
No	氏名	所属団体	レポート題名
1	福井 康人	戦争遺跡保存ネットワーク高知	高知の本土決戦陣地「トーチカ」～発掘調査から見えてきたもの～
2	中田 均	浅川地下壕の保存をすすめる会	浅川地下壕の保存運動の現状と課題
3	原田 弓子	貝山地下壕保存する会	「大東亜戦争」、海軍作戦写真記録Ⅱ紹介
4	小須田 廣利 新家 靖之 中野 志乃夫	東大和・戦災変電所を保存する会	何故、戦災変電所は保存されるに至ったのか？『戦災変電所の奇跡』より
5	和田 千代子	731部隊遺跡世界遺産登録を目指す会	「侵華日軍731部隊」遺跡保存・世界遺産登録における
【第2分科会（調査の方法と整備技術）】			
No	氏名	所属団体	レポート題名
1	高谷 和生	くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク	陸軍人吉秘匿飛行場の調査と熊本県の現状
2	大西 進	河内の戦争遺跡を語る会	陸軍大正飛行場に関わり現存している2ヵ所の地下壕
3	平川 豊志	松本強制労働調査団	戦争遺跡の木質遺物Ⅵ 亀島山地下壕の木質遺物、型枠の材質について
4	大原 純一	戦争遺跡保存ネットワーク高知	女川山防空監視哨
5	奥村 英継	戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会	サハリン平和ツアー報告（2016年8月）
【第3分科会（平和博物館と次世代への継承）】			
No	氏名	所属団体	レポート題名
1	大野 治	亀島山地下壕工場を保存する会	電子紙芝居「亀島山地下壕の生い立ち」の制作
2	山田 謙 喜田美登里	日吉台地下壕保存の会	日吉台地下壕関連戦争体験者への聞き取りと記憶の継承
3	北原 高子	NPO法人松代大本營平和祈念館	30年、300回、300号を超えた「松代大本營」の保存運動
4	追立 敏弘	「八絃一字」の塔を考える会	「八絃一字」の塔を警告碑に、平和ミュージアムをつくりたい
5	十菱 駿武 都井 正博	松村達・喜田美登里 「東ヨーロッパの戦争遺跡を学ぶ研修旅行団報告」	ポーランドのオフスカ地下施設とナチスのリーゼプロジェクト

第3分科会報告（2017.8.20）

No.2 日吉台地下壕関連戦争体験者への聞き取りと記憶の継承

日吉台地下壕保存の会 報告者 山田謙、喜田美登里

(1) 何のために聞き取りをするのか？

私たちは、これまでいろいろな聞き取り調査をしてきました。2015年12月には日吉台地下壕周辺の空襲体験者への聞き取りを、資料集『日吉は戦場だった』という冊子にまとめ発行しました。今年の年末ごろには、日吉で勤務した通信兵や女性の理事生（事務員）などへの聞き取りを、資料集第2集として発行する計画です。

しかし、これは研究資料として作ろうとしているのではありません。私たちは市民的な運動として見学会や、戦争展の展示、講演会、ガイド養成講座などをやっています。学者・研究者ではありませんので、研究調査それ自体が目的ではありません。

こういう聞き取り調査は、もちろん、戦争体験者が高齢化し、戦争の記憶が急速に風化・消滅しつつある中で、大切な課題です。しかし問題は、この戦争体験の記憶を、いかに私たち戦後世代が引き継ぎ、次世代に継承していくかだとおもいます。あの安保法制（戦争法）の制定によって、今の日本はとてもきな臭くなっています。戦争体験者の皆さんに、一様におっしゃることは、「あの悲惨な戦争を二度とくりかえしてはならない」ということです。「人からモノへ」ということが言われ、同時に「人からヒトへ」と言われています。

私たちは、私たちの見学ガイドの内容をより豊かに、よりリアルに語れるように、そのための聞き取り活動をしています。私たち自身が体験者から学ぶ。それを若い世代に語り伝えていく。もの言わぬ戦争遺跡の内外で何が起きていたのか、誰が何をしていたのか。そこで何を感じ考えていたのか。私たちが、モノにかわって語る。語り伝える。そのための聞き取り調査です。

(2) 2008～2017年の聞き取り活動

① 日吉周辺の空襲被害調査

2008. 2. 27/4. 4 日吉台南部・箕輪地区空襲体験
 5. 29 日吉台東部・宮前地区空襲体験
 6. 11 日吉台東部・宮前地区空襲体験
 7. 2 日吉台西部・日吉本町空襲体験
 7. 19 日吉台東部・宮前地区空襲体験
 8. 4 日吉台北部・大門地区空襲体験
 9. 3 日吉台一帯・空襲被害状況
 10. 4 日吉台南部・箕輪地区空襲体験
 2009. 10. 4 日吉台西側・下田町空襲体験、米軍搭乗員を取囲む

小島英佑さん（大正14年生、当時83才）
 鈴木辰夫さん（大正14年生、当時83才）
 足立寛さん（昭和13年生、当時70才）
 籠山博子さん（昭和2年生、当時81才）
 松井四郎さん（昭和11年生、当時72才）
 Wさん等の話を伊藤鈴太郎さんから聞いた。
 板垣大助さん
 吉野澄子さん（大正15年生、当時82才）
 田辺泰孝さん（大正10年生、当時88才）

日吉周辺は日吉駅西側の商店街を除いて、農家の点在する農村地帯です。にもかかわらず台地の周囲の農家が軒並みと言っていいほど空襲被害を受けています。「これは海軍がいたから巻き添えになったのだ」と住民の方はよく言っていました。しかし横浜や川崎と違って、その中間地域の日吉地区は空襲被害調査がほとんどされていませんでした。この調査の結果ほぼ全容がつかめ、想像以上に徹底した焼夷弾攻撃を受けていたことがわかりました。また、あわせて日吉以南の調査も「横浜空襲を記録する会」と共同で行いました。その後、日吉以北の川崎市中原区の空襲被害調査が、「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」で行われ、日吉周辺ばかりでなく、東横線沿線がくりかえしB29の空襲を受けていたことがわかりました。また海軍による土地の接收や地下壕築造の邪魔になる農家家屋の強制移動（引き家）の実態も知ることができました。

② 日吉連合艦隊司令部・元通信兵への聞き取り・手記・講演

2010. 9. 25/5. 29/9. 30 2013. 4. 17 暗号兵 栗原啓二さん聞き取り
 2013. 4. 17 暗号兵 新井安吉さん聞き取り、手記もいただいた（会報に記載）
 5. 13 暗号兵 栗原啓二さん、ガイド養成講座でインタビュー形式聞き取り（会報に記載）
 2014. 10. 25 電信兵 大島久直さん聞き取り、手記もいただいた（会報に記載）
 12. 28 暗号兵 平田一郎さん聞き取り、手記もいただいた（会報に記載）
 2015. 2. 28 通信兵 5人集合、懇談。栗原啓二、大島久直、平田一郎、保坂初雄、T・Hの各氏
 5. 9 暗号兵 平田一郎さん、ガイド養成講座で講演
 2016. 11. 1 電信兵 保坂初雄さん聞き取り（会報に記載）

③日吉海軍施設、航空本部・軍令部第3部・人事局の勤務者・元理事生

- 2013.9.28 航空本部理事生 中川雪子さん、福井寿美子さん、逸見サヨ子さん聞き取り
 11.30 航空本部理事生 中川雪子さん、福井寿美子さん聞き取り、中川さんお別れ寄書き帳いただく。お二人の東京下町大空襲の体験談も（会報に記載）
- 2016.5.9 航空本部第1部第3課軍属I・Sさん聞き取り、同僚の方が描いたスケッチを頂く。
 6.6 軍令部第3部理事生 横山百合子さん聞き取り、第一校舎と地下壕で勤務。女学校で勤労動員。
 7.15 人事局理事生 立川重子さん聞き取り、日吉から大船の地下壕へ移動。記念写真いただく。

④海軍・軍艦乗組み水兵

- 2016.3.12 電信兵 近藤恭造さんガイド養成講座講演、レイテ沖海戦空母瑞鶴、大和田通信隊（会報に記載）
 4.9 駆逐艦雪風水雷兵 西崎信夫さんガイド養成講座講演、大和沖縄特攻護衛と救助（会報に記載）

⑤日吉学生寮寮生、日吉付近住民、勤労動員女学生

- 2013.3.9 元寮生 芹沢宏さん講演会でのお話
 7.1 住民 K・Sさん聞き取り、地下壕西側（箕輪）出入口付近の記憶（慶應大学研究誌に記載）
- 2014.3.8 元寮生 芹沢宏さんガイド養成講座講演、敗戦直後の寮と地下壕探索、日吉の町
 2017.3.4 住民 中野幹夫さんガイド養成講座講演、日吉の北・川崎市中原区元住吉空襲体験（会報に記載）
 4.15 住民 堤君代さん聞き取り、日吉台小学校・海軍功績部が残した土マンジュウ型掩体の記憶など
 4.22 勤労動員元女学生7人集合 神奈川女子師範5人、東京女子高等師範2人の元女学生。元住吉の東京航空計器工場ほかに勤労動員、空襲・機銃掃射体験。神奈川女子師範の同窓会誌の体験記をコピーさせていただく。
- その他、見学会や講座などでの聞き取り多数

（3）聞き取り活動をふりかえって

★ 私たちの会が28年前に発足して初めの10年ほどは、精力的な聞き取り調査が行われていました。その成果は慶應義塾生協ニュースや会報の記事として残され、貴重な資料となっています。しかしその後、聞き取りよりも文書資料調査が中心になっていました。ですが2008年になり上記の空襲被害調査をチームをつくっておこなったわけです。その後は、見学会に来た体験者のお話を「聞き取りメモ」にする程度でしたが、地下壕での通信関係でわからないことが多く、受信機の台数さえ諸説あって不明でした。アンテナのことも、勤務体制もわかりませんでした。

★ それで元暗号兵の栗原さんが会の総会に見えたことをきっかけにして、2013年より意識的に体験者への聞き取りをすることにしました。その場合に聞き取り活動は、なるべく複数の人で聞く。聞き取りメモや記録をつくり、また録音して必要なら文字起こしを外注する。このように聞き取ったことをかならず、会のメンバーで共有できるようにこころがけました。会としての活動、共同作業としてやるようにしました。これは、見学会のガイド内容を豊富化するとともに、会のメンバーの絆を強くしていくためでもあります。個人プレーでは知識は得られても、戦争体験を次の世代に、みんなで語り伝えていくことはできないとの思いからです。

とはいえる聞き取りをしっかりとやるためにには、前提的な知識がある程度は必要です。とくに通信関係は電気知識、設備関係は土木工学の知識も必要で、海軍の当時の作戦計画や戦

況もわかつていないうまく聞き出せません。どのような質問をするかが大事です。専門知識が特にあるわけではない私たちがこれをカバーするには、やはりチームプレーだと思います。人それぞれの知識や経験の得意なところを出し合って、お互いに勉強しあいながらやっていくように心がけています。

★ 聞き取りをすると、今までわからなかつたことがわかつたり、新たな意外なことを聞かれたりします。ただ何といつても70年以上前の記憶ですから、不正確なのは当たり前です。体験者のお話は事実そのものではなく、体験したことの、その人の意識への反映を言葉や文字にしたものなのだということも、聞き取る私たちは注意する必要があります。ところで聞き取りをしていて強く印象に残るのは、その人の語る知識より、その人の感じ方です。元暗号兵の平田さんは、地下壕で「あの時と同じにおいがする。涙が出る」と言い、また「玉音放送で日本が負けたと知って、他の少年兵と肩を抱き合って喜んだ」とも言っていました。これが語り伝えるべき戦争体験というものなのではないかと思いました。各地で聞き取り活動に取り組まれているみなさんとともに、戦争体験を次世代に引き継いでいきたいと思います。

No.5 ポーランドのオフスカ地下施設とナチスのリーゼ

プロジェクト 報告者：東ヨーロッパの戦争遺跡を学ぶ研修旅行団
十菱駿武・都井正博・松村達・喜田美登里

戦争遺跡・軍事史近現代史研究所主催、11名で2016年11月に東ヨーロッパ、ポーランド・チェコの戦争遺跡の巡査調査を行った。ナチス第3帝国が第2次大戦時に侵略したワルシャワ、プラハ、シンドラーの工場、アウシュビッツ・ビルケナウ絶滅収容所等をまわったが、オフスカ地下施設を紹介する。戦跡全国シンポで外国の戦争遺跡については、ドイツのミッテル・バウドーラ地下工場、中国黒龍江省、韓国済州島の戦争遺跡は紹介されている。ポーランドのオフスカ地下施設は未発表であり、日本の地下壕と共に構造があり、戦争遺跡調査研究に参考となるので紹介する。

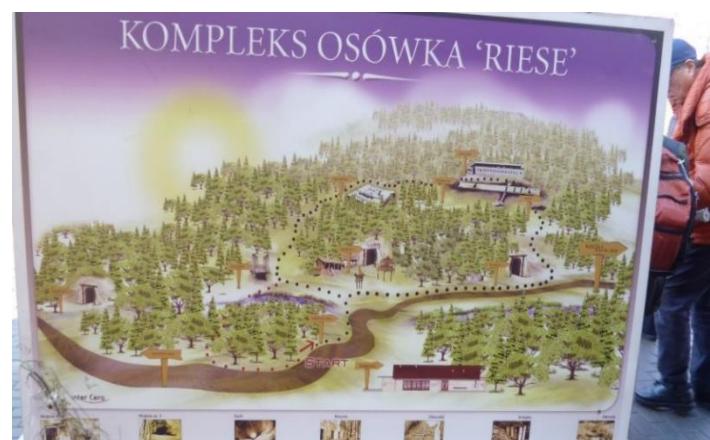
1. オフスカ施設の立地と背景

ポーランド南西部、下シロンスク地方には、第2次大戦中ナチス・ドイツが建造したオフスカ地下施設が残されている。建設工事は1943年の夏から敗戦間際の1945年初頭まで続けられた。フクロウ山では30kmに及んで6つの地下施設をつなぎ、鉄道を走らせ、ヒトラーの司令本部なども造られる予定だった。最も工事が進んでいたといわれるオフスカ地下施設（完成度6.9%）は山上の地上施設と地下施設1200mが公開されている。

2. オフスカ地下施設の構造と特徴

ソヴィ山脈フクロウ山に1943年末から1945年までナチス軍によってつくられた地下複合施設。地下壕は標高569mと標高680mと異なった高さに2本の主坑が掘られ、長さ1673m、面積6197m²、体積26149m³となっている。坑道の規模は幅4~8m、高さは2~6mで、ほとんど掘削途中で二段掘り（底設先進導坑法）で下半分は掘り残され、天井に型枠板や坑木がそのままの坑道も見られた。コンクリート被覆は一部しかない。

地下施設が公開されるようになったのは1996年である。現在、訪問者にはツアーガイドによつ

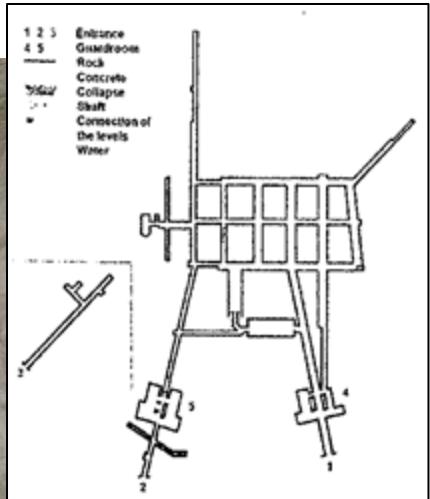


オフスカ地下施設案内板（山頂の施設跡と地下施設入口3か所が書かれています）

て過去の歴史が説明されている。オフスカ地下施設には未完成の異なる段階の建設工事が見られ、護衛兵宿舎、射撃場、手榴弾発射装置、空気換気装置、上位の水路と横坑道、舟で移動する冠水した横坑道、工場機械鉱山工具、機関銃、戦車、軍事兵器装備の遺物などがみられる。森林の中央には鉄筋コンクリート造の建物があり、地下壕は、換気坑堅坑で導かれ、鉄道のプラットホーム、ビル建築資材置き場、石化したセメント袋がある。山頂森林には原子爆弾の原タイプ製造所と思われる全ての種類のパイプ工事とコンクリートブロック建物の基礎土台がある。



地下施設内部のガイド（右の兵士は人形です）



オフスカ地下施設略図

3. クションシュ城の司令部壕

クションシュ城はドルヌイ・シロンスク県の県都ヴロツワフに近いポーランド王シロンスク公の城館で、ピンク色の外壁が特徴。城の地下にナチス最高司令部が計画された。ヒトラーの住宅と2万人の武装兵士が配備される予定だった。地下壕1階は地下15m長さ80mで城と結ばれていた。地下2層は地下53mに4本のトンネル（幅5.6m、高さ5m）があり、堅坑がつないでいた。現在クションシュ城城館と1層のトンネルは公開されている。クションシュ城の建物に旅行団が宿泊した古城ホテルがある。

4. ナチスとリーゼプロジェクト

リーゼプロジェクト Project Riese は1943~1945年、当時ドイツ領（現在ポーランド）下シロンスクのクションシュ城とフクロウ山地に計画されたナチスドイツの建設計画（暗号名リーゼ=巨人）である。この地はヒトラーの山荘があったオーバーザルツブルクとヴァウブズィフを囲む安全な山地で、この山地にナチス軍司令部と武器工場・公的居住区域を含む計画で、建設作業には戦争捕虜・強制労働者・グロスロゼン収容所の人々（ユダヤ人・ポーランド人・ハンガリー人・ギリシャ人）が使役され、多くは病気と栄養失調で死亡した。

リーゼプロジェクトにはクションシュ城 Ksiaz Castle、オフスカ複合施設 Complex Osowka、ルゼッカ複合施設 Complex Rzeczka、ヴロダルツ複合施設 Complex Włodarz、ソコレック複合施設 Complex Sokolec、ユゴヴィチエ複合施設 Complex Jugowice、ソボン複合施設 Complex Sobon、ジェデリンカ複合施設 Jedilinka Palace、グルスズヤカ Gluszyca の9施設が文府しているが、最大規模はヴロダルツ複合施設全長2955mで、クションシュ城地下の完成率75%で、他は11%~1%で未完成で1945年はじめドイツ軍退却、1945年4月30日ヒトラー自殺後、ポーランドはソ連赤軍に支配された。他の地下施設は未公開。調査や保存状態は不明。今後の現地調査と資料探索が必要である。

フィールドワーク (2017.8.21)

Aコース：前浜掩体と耐弾式通信所見学 横暴な航空基地建設と、無惨な練習機「白菊」特攻

運営委員 山田譲

8月21日の朝、私たちは晴天にめぐまれ暑い日差しの中、「掩体壕を文化財として守り育てる会」の方と南国市教育委員会の方の案内で、大型バスに乗って出発しました。行く先は高知龍馬空港周辺の海軍飛行機格納用の掩体群と、高知海軍航空隊通信所地下壕です。場所は高知市の東の南国市で農村地帯。稻刈りと田植えが隣りあっている二期作の風景を、私は初めて見ました。

バスの中でまずお聞きしたのは、1941年から始められた海軍飛行場工事で「命山」が削られて平らにされ、滑走路がつくられたということです。ここは物部川の河口付近で低地帶です。江戸時代に大津波があり、この小高い丘に人々は逃れたので「命山」と呼ばれるようになったそうです。そんなことには何のおかまいもなく、この丘をつぶしてしまいました。土佐湾奥のこの土地は大津波の危険地帯です。滑走路の位置をずらせばすむはずなのに、なんとも傍若無人な話です。そして農民の土地を強制買収し追い出していました。

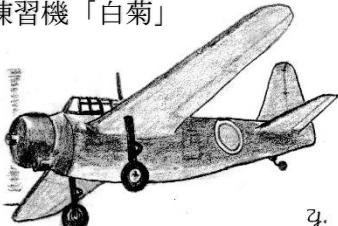
現地に近づくと、広々とした田畠のあちこちにドーム型をしたコンクリートの掩体が点在していて、とても不思議な光景です。ここの掩体群は戦時中は合計31基もあったそうですが、今も残っているのは7基です。前浜公民館でバスをおり、案内の方から概略の説明を受けたあと、まず7号掩体に行きました。幅22m、奥行き12m、高さ5mで鉄筋入りのコンクリートでできています。作り方は、まず土を土饅頭のように積み上げてその上にコンクリートをかぶせて固めて、中の土を後で掘り出し掩体の上にかぶせて耐弾性を補強するというもので、これは海軍設営隊のZ5工法になります。

しかしこの7号掩体でおどろいたのは、掩体の下を農道と用水路が通っていたことです。案内の方の話だと、用水路があるのに用水路をつぶして掩体をつくってしまったというのです。村の農民は驚きあわてて有力者を立てて海軍航空隊司令部に出かけ、土下座して「掩体の予定位置をずらしていただきたい」と懇願しました。ところが「この国賊が！」と言って蹴りつけられ、泣く泣く引き下がらざるをえなかつたそうです。農民の命の水を平気で奪い取るこの横暴さが、戦争遺跡として今も残っているのだと思いました。敗戦後、用水路と道路をふさいでいた掩体後部のコンクリート壁は農民によって打ち壊され、その結果、



農道と用水路が通る「7号掩体」

練習機「白菊」



練習機「白菊」が収納されていた「5号掩体」

掩体の下に用水と道路が通り抜ける今の形になったのです。

つぎに行ったのは5号掩体です。ここは敷地が公園としてきれいに整備され案内看板も立てられていて、自由に見学できるようになっています。南国市は2006年に、ここの7基の掩体を「前浜掩体群」として南国市史跡に指定しました。南国市教育委員会の説明チラシには「もの言わぬ掩体ですが、無言のうちに戦争の悲しさ、平和の大切さを訴えています。」と書かれています。これも地域の地道な市民的な活動の成果にちがいありません。

この掩体群に収納されていたのは、ゼロ戦のような戦闘機ではなく、機上作業（偵察）練習機「白菊」でした。高知海軍航空隊は偵察搭乗員の訓練を目的にしてつくられましたが、戦争末期には、この練習機を特攻機として使用し26機が出撃したそうです。この飛行機は主脚は固定式、主翼は木製合板張り、アルコール燃料で飛び最高速度は時速200km以下というしろもの（Wikipediaによる）です。海軍鹿屋基地通信隊に勤務した元学徒兵・野村一夫氏の『回想 学徒出陣』によれば、この「白菊」特攻隊は1945年5月27日に夜間出撃し沖縄方面に向かったものの、米軍レーダー網にキャッチされ、米軍の無線電話通信で「奇妙な物体が海面上に見える。……飛行機にしてはあまりにもスピードがスローである。very slow, very slow」という音声交信を野村氏は傍受したそうです。当然、しごく簡単に迎撃されて撃ち落とされてしまったとおもいます。こんなみじめで無謀な特攻作戦のための掩体だったのかと思うと、なんともたまらない気持ちがします。

日吉とちがう通信所地下壕の構造



通信所地下壕 出入口階段



通信所地下壕内部

掩体群の次に行ったのは、高知空港の反対側にある高知大学構内の航空隊通信所跡、耐弾式地下壕です。ここは日吉と違って、横穴式でなく平坦な地面から階段を下った先に細長い部屋がつくられていました。幅2.55m、高さ2.6m、長さ20mほどの部屋がいくつかに仕切られていて、部屋の両端にそれぞれ左右上方に向かって13段の階段があり外に出られるようになっています。この細長い部屋二つが狭い通路でつながっていて全体がH型になっています。天井はアーチ状で電気配線用の碍子も残っていました。壁に32cm角の四角い穴が開いており、通気口だったそうです。床の壁際には排水用の深い溝がありますが、現在は床はかなり水がたまっている状態でゴム長靴をお借りしての見学でした。

階段上の地上構造物の部分は破壊されて平らになっていましたが、現在はその上に小さな小屋のようになったコンクリート製の建物を建てて、出入口をおおってありました。出入り可能な階段4か所の上にそれぞれ、この小屋型建物が建てられています。日吉の126段の階段の上も、あんな風にすれば出入り可能になるかもしれません。高知大学と南国市がこの戦争遺跡をとても大切に考え、また単に保存するだけでなく見学の便宜をはっきりと意識していることに、ちょっと驚いてしまいました。町おこしという位置づけもあるとはおもいますが、悲惨で愚かな戦争を二度と繰り返さないために次の世代に戦争体験を継承していくという強い意志を感じました。今後も高知のみなさんとの絆を大切にしていきたいと思います。

Bコース：旧歩兵第44連隊弾薬庫・講堂、陸軍墓地ほか 参加報告

副会長 亀岡敦子

最終日21日は、2か所のフィールドワークがあり、高知市朝倉地区にある高知大学校地に残る旧陸軍歩兵第44連隊の将校用日本庭園と、弾薬庫と講堂の見学をしました。一見古びた木造建築にすぎませんが、説明を聞きながらよく見ると、意匠をこらした箇所もあります。2015年には市教委の委託により高知大学が調査し、現在文化財として保存と整備が求められる活動が行われています。しかし、この建物のある校地を売却する計画は進んでいます。ネットワークとしても署名に取り組みましたが、見通しは甘くはなさそうです。

次に、高い石段を上ると小高い丘の上を平らに整地した陸軍墓地があります。日露戦争以降の戦死者の墓地で、戦没年月日だけではなく、名前や位と出身地などはっきり読み取れる、墓碑も多く、またそれを丁寧に調査した報告書もあり、戦没者が少しは浮かばれるのではないかと思いました。空襲の碑などもそうですが、亡くなった人の名前と年齢が記されていると、より具体化されて、戦争の本質を見抜く手助けになりますが、戦跡は常に顕彰碑にされる危うさを抱えています。大分からの分科会報告にあったように、確信をもって「警告碑」を建立し、次世代へもそう伝えていくことが肝要と思われます。



「朝倉陸軍墓地」
日露戦争以降の戦没者の墓石がならぶ



旧陸軍歩兵44連隊の弾薬庫 高知大学構内

拡大ガイド学習会報告再録（2017.7.8）

第一報告：北寮で勤務の頃 運営委員 中澤 正子

私は昭和32年秋から昭和39年夏まで、慶應義塾大学の寄宿舎北寮にあった日吉研究室に勤めていました。日吉駅から銀杏並木をのぼり第二校舎の中にあった庶務課で出勤簿に印鑑を押し、第一校舎（現慶應義塾高校）の前のケヤキ並木を通ってまっすぐ研究室に進みました。

ケヤキ並木が終わろうとする所のケヤキの木の並びにコンクリートの建造物があり、下に防空壕があると聞きました。随分後のこと、この防空壕が地上に現われたことがあります。壕は高校のグラウンドの方に伸びていたということです。陸上競技場の方へも伸びていたのではないかと思います。競技場の壕は薄暗い木立ちの中に横穴が見えていたと思います。この辺りに家があって慶應関係者が住んでいたと思います。

ケヤキ並木が終わった所は小高い丘になっていて草が生い茂っていました。中に家があり慶應関係者が住んでおられたようです。この辺りは現在高校の日吉会堂になっています。



寄宿舎北寮（2012年5月12日撮影）



第一校舎前にあった軍令部待避壕入り口（昭和34年頃）

日吉駅の綱島寄りに箕輪池があり、そのそばを通りてキャンパスにのぼって来る道がありました。道の脇にパレットクラブと仏教青年会の建物がありました。この道は百年祭の頃、横浜市に寄贈されたという事を聞きました。普段この道は殆ど使わず、研究室へはグランドの端か道路か分からぬよう道を歩いて通いました。現在この道への出合いは日吉会堂脇とチャペルの所になっています。また、グランドが終わる所に高校校舎の裏からくる道が繋がっていましたが今は閉じられています。この道の脇に赤屋根食堂がありました。戦前に建てられた立派なものは戦後進駐軍が火事をして焼けてしまい、戦後、建てられたもので普通のお店の感じのものでした。

どの辺にあったか定かに覚えておりません。

高校玄関前からの道と裏からの道が合流する所には、弥生の住居跡があり、そのそばに現代の遺跡・戦中の地下壕のコンクリートの建造物が並んでいます。当時この辺りの道は油の匂いがしており、道端の草が黒く汚れています。埃り除けに油がまかれたということです。テニスの練習場がいつの間にかできていました。道の反対側に遠く丹沢山塊が望まれ、赤瓦の日本家屋など3～4軒の家が並ぶ箇所があり、時々ピアノのダイナミックな音が聞こえていました。後にわかったことですが、中村紘子さんのお家から聞こえていたのです。今は建て変わってますが数軒の家はあります。

高台の行き止まりまで進むと、ここにもいつの間にかできたテニスコートがあります。左に進むと自動車の練習場（行ったことなし）、右に進むと寄宿舎があります。昭和30年頃の写真に進駐軍の家族が住んでいたプレハブ住居の写っているものがあり、遠景に第一校舎が写っているので場所を確定できます。戦前、この辺りに体育会事務所があったらしいのですが、空襲で焼けてしまったということです。昭和24年10月に日吉キャンパスは返還されるのですが、返還保留中の地所と言うのが昭和32年に返還されたと年表にでています。

昭和35年頃白樺と石をデザインした庭のある塾員の方の立派な家が建ちました。後に地所が慶應に寄贈されたと聞きました。

その隣りに木造のアパートが建ちました。その隣りにもいつの間にか民家が建ちました。

このアパートの前の南寮と北寮に別れる所にコンクリートと土でできた建造物がありました。いつもこの脇を通っていたのですが「地下壕の何かだろう」ぐらいで話はそれだけでおわりでした。ビートルズの歌が流行り始めた頃で「ビートルズって何」と話したことは記憶に残っています。道は二手に分かれ私たちは北寮へと進みました。南寮への道とで車回しのように道がついていました。

左から南寮、中寮、北寮と同じ建物が建っていました。中寮には学生が住んでいました。北寮は日吉研究室の看板が架かっており、管理人のご夫妻が家族も一緒に住まっていました。玄関を入ると階段があり一度だけ下り階段を降りて見ました。台所がありました。玄関にもどり廊下を進むと突き当りが事務室になっており、その奥と横が書庫になっていました。

この事務室で仕事をしておりました。資料（書籍、雑誌、その他の資料）の収集、書庫・個室の管理、各研究室（化学、物理、生物、数学、心理、美術、音楽）との連絡等いろいろな仕事がありました。資料は英・仏・独・その他諸国語が入ってきます。外国の書物を手にするのははじめての経験でした。私は雑誌を受け入れたり、資料を貸し出したり、和書の整理をしていました。コピー機が活躍を始めた頃です。

寄宿舎は床暖房で東洋一ということを聞いていましたが、北寮にいた頃は冬になるとストーブで暖を取りました。私はストーブを燃すのが上手でした。夏は扇風機なしの状態がつづいていました。離れ小島の北寮の昼休みは中寮の卓球台が空いているのを確認して使わせてもらいました。

昭和33年は慶應義塾の百年祭がありました。それを記念して麻生家から斯道文庫の寄贈があり、南寮に移転してきました。斯道文庫はやがて三田の図書館に移っていました。その後に研究室が南寮を利用するようになったのか定かではありませんが個室の一部を書庫として使用していました。建物の脇の扉を鍵で開けて入りました。雀がチュンチュンないっていました。ある時、南寮と中寮の間にある得たいの知れない建造物のそばにいた時、寮のおおばさんから「戸を開けてご覧？」と言われて引き戸を引くと木製のお風呂がありました。

「覗いてごらん」と言われて下を見ると真っ暗闇の中に階段が、見えました。「この下は大きな地下壕だって」との話でした。昭和35年頃、書庫が一杯になり増築しました。その後、研究室が遠いとの話が具体化し昭和39年の夏、第四校舎に近い場所に新築移転しました。移転後も個室の要望は多く研究室棟が日吉駅近くの綱島街道沿に増築になり一段落の感じがありました。

昭和30年代は教室なども進駐軍の残したプレハブ（パラック）校舎で、今の中庭は埋め尽くされておりました。労働組合等の建物の取り壊しを最後として、日吉キャンパスの風景は昭和と共に去り、平成と共に生まれ変わったと思います。

2017.7.8 拡大ガイド学習会で話を加筆訂正したものです。

第2報告：軍令部第三部が使用したチャペルについて

《資料紹介》『慶應義塾大学基督教青年会創立100周年記念誌』よりわかったこと

運営委員 山田淑子

日吉のチャペルは、現在も慶應大学キリスト教青年会（YMCA）の部室として使われているが、『記念誌』（1998年刊）によりチャペルについて次のようなことが明確になった。

① 日吉のチャペル建設

《建設年》「日吉のチャペルの出来た頃」 三村馨氏寄稿

「私は縁あって五十年前の昭和十一年春、慶應大学の日吉予科に入学した。」「翌年に日吉のチャペルは献堂され、爾後今日迄その姿を保つて居る。」⇒この文章からするとチャペルの建設・献堂は昭和12年（1937年）である。また、慶應義塾大学基督教青年会の主な行事年表によると「昭和十二年十月二十四日 日吉ホール献堂式並寄贈式（慶應義塾基督教青年会沿革）」

《設計》「チャペルの憶い出」 小林富次郎氏

「塾YMCAの先輩横濱禮吉君が自らヴォーリス氏に設計図を依頼し、OBに呼びかけて当時の会長三辻教授と槙理事のお計らいで日吉キャンパスの一角に地を定め、医学部の原嶋教授、文学部の松本教授、白洋舎の五十嵐丈夫君それに私共数名が発起人に決定。」「六、七十名の

収容力のある建物が出来ることは、塾内で精神運動の一翼を担う YMCA の発展に役立つと塾先輩の野畠牧師始め一同大賛成。」

⇒設計図はヴォーリスに依頼し、6、70名収容のチャペル建設であった。

《予算・内外構造》「日吉のチャペル 慶應義塾基督教青年会の日吉ホール完成 献堂式並寄贈式」 島崎隆夫氏

「四千円の予算は七千円に拡大されながらも工事は着々進行しこの十月に椅子其他の什器も整い無事完成を見たものである。」「ホールは日吉の大学予科第一校舎とトラックとの間の道を進んだ突当たりに在って建坪は二十六坪、松の木をめぐらした高地にある、外観は塔を頂いた濃緑の屋根に側面は白色を配したものであり内部は黒褐色の腰板に薄いクリーム色の壁で部屋は前部と後部に別れ後部は平常は会員のルームとして使用される様になって居り本棚及びテーブル等が置かれ前部は教壇及び約六十人を収容出来る会堂になって居り又必要に応じては前後両部屋を通じ使用の出来る様になって居る」⇒予算は当初の予定四千円を超えて七千円に拡大されたが完成し、外観は現在私たちが見ることのできる赤い屋根ではなく濃緑の屋根であったこと、側面の白色は現在と同じ。内部については建設当時のしつらえを知ることができた。

②アジア太平洋戦争中のチャペル

《戦争批判の聖書講義》「昭和十七年頃」 佐藤敏夫氏

「昭和十七年といえば、太平洋戦争の最中であり、周囲はなんとなく騒然としており、われわれの前には戦場があった。しかしそれにもかかわらず昭和十七年の日吉の春ははなやかで美しく、私どもはこぼれるような日の光に自分の青春を感じていた。いまから考えると青年というものは本質的に明るいものだと思う。客観的に見れば暗い青春であったが、私どもはそれなりに夢をもち希望をもっていた。」「戦争中ではあったが、日吉の丘の上にはまだ一応の平和があり、聖書講義を静かに聞きたいというような雰囲気があった。鈴木先生(注)は聖書の話のほかに、時に応じていくつかの問題をとりあげ、それを話題にして下さった。その内容のあるものは、いまでもはっきりおぼえている。最後の講義の日に終わりにあたって幾分長いお祈りをして下さったが、その中で『いま世界のあらゆるところでは残虐な戦争が行われている…』という意味の言葉を聞いてハッとさせられたことがあった。現在ではなんでもない言葉なのだが、当時は戦争を美化する声が巷にあふれており、戦争に対する批判的な言葉はキリスト教界の中でもあまり聞かれなくなっていたので、印象的だったのである。」

(注) 「鈴木先生」とは鈴木俊郎氏で無教会主義の内村鑑三の弟子・研究家

⇒チャペルでの連続講義の最終日であったが(1942年)、「いま世界のあらゆるところでは残虐な戦争が行われている」と戦争中という厳しい状況の中においても戦争に対する批判をチャペルに集った学生たちに話されたことは、平和を祈るキリスト者として真の言葉であったと思われる。



チャペル南側、十字架の塔の屋根だけは今も緑色

《戦中の学生生活》「思い出」久威智氏

「私は一九四〇(昭和一五)年四月に経済学部予科に入学して日吉に通うようになり、同時に慶應義塾基督教青年会に入会した。その翌年の十二月には太平洋戦争に突入し、国民生活万般について、国や軍部の締め付けは厳しくなってゆき、特に戦時特例として、学業年限短縮や文系学生の徴兵猶予停止が、学生生活に大きな衝撃と変化を齎したのである。そして、四三年一二月一日、所謂『学徒出陣』で出征するまでの三年八ヶ月間が私にとっての戦中学生生活であるが、日吉チャペルを中心に、キリスト者学生としての生活は、『信仰の修練』、『師友の交わり』、『大学生活の体得』という点で、私の生涯を通じて最も実り多い時期であったと思っている。」「当時日吉周辺は、建物もそれほど多くなく、キャンパス内も緑の多い広々とした感じで、十字架の見える小さなチャペルの隣も、当初は空地で、暫くしてから、それまでの藤原工大(後の工学部)の入口付近に位置していた園芸部が移転して来たと記憶している。時節柄、全学的に緊張感はあったが、他校に比すれば比較的自由な雰囲気であった。体育会関係や、文連の中でも国防研究会その他硬派の活動が盛んであり、時には右翼紛いの掲示等が大きく貼出されることもあったが、基督教青年会は、多くの良き師、良き友に恵まれ、自由に豊かな集りを持つことが出来た。」「当時、定期的に行っていたのは、早天祈祷会、聖書研究会、読書会(何れも隔週一回位だったろうか)と、時折開く懇談会などであった。」

⇒国や軍部の締め付けがきびしくなっていたが、その中でもチャペルを中心とした学生生活は若者らしいものであり、キャンパス内の当時の状況についても知ることができた。

③海軍のチャペル使用 「昭和十九年～二十二年の間の塾Y活動記録」

石川獻之助氏

「海軍省によって日吉本館が接收され、やがて日吉の青年会チャペルも命令的に使用され、備品のうち聖書、讃美歌、記録等は取敢えず林、石川所属の日本基督教団深川猿江教会に保存方を依頼したが、二十年三月十日の空襲により焼失した。その他の備品、オルガン、鐘、ストーブ等はチャペルの戸棚に鍵をかけて納めた。この交渉に海軍省側で当った人は中田実氏で、基督者であって多くの点で好意的取計らいを受けた。しかしチャペルは終戦の混乱時に附近住民の手によって荒され、扉やガラスは破られ、海軍省関係の物品と共に備品の一切を持去られ、建物の外形を留めるのみとなった。」

⇒海軍に使用された時のチャペルの備品については一部、東京大空襲で焼失し、戦後の混乱時ですべてを失ってしまったことがわかった。

④戦後のチャペル 「戦後塾YのクロニクルIII」 小滝譲二氏

「昭和二十二年度」「十二月十五日(月)クリスマス礼拝と祝会 説教 福田正敏先生 『世の光』於 日吉チャペル」「此の年の日吉チャペルは既に進駐米軍がチャペルとして使用していた為よかれあしかれ恐らく献堂されて以来最も豪華な施設がなされていた。暖かすぎるほどの暖房、当時の日本の教会では想像もつかぬアメリカ式のきらびやかな祭壇、照明そして電気オルガン等々、我々のチャペルとは思われぬ程であった。」「この集会にチャペルを使用するには進駐米軍の許可が必要であったので十一月下旬中島と小滝は日吉進駐部隊長の米軍大佐を訪問し我々の下手な英語で解ってもらうのに苦労したが、ともかくOKということになったのでチャペルを見せてもらうと右の様な設備であった。」「出席計三十余名の盛大なクリスマス礼拝と親睦祝会を持つことが出来たものである。」「会費十五円を徴収した全額が三百六十円であったから二十四名が会員の出席であった。ふかし芋みかんアメ等が祝会のご馳走で、礼拝後明るく暖かい会堂でいろいろ楽しいゲームをしたが、塾Yの会合でこんな雰囲気は初めてであった。」「前年のクリスマスが米軍がチャペルに使用する準備中で大工道具や木材カンナ屑等が散乱する中で寒々と全員がオーバーを着たまま礼拝を守ったことを思い合わせると夢のようなチャペルの変貌であった。」

⇒チャペルは戦後の混乱で備品、調度等のすべてを失った。そこに入ってきた米軍がチャペルを使用するため、豪華な施設をほどこしたことがわかり、Y塾生も米軍の許可をとり、明るく暖かいクリスマス礼拝、祝会を行うことが出来、チャペルの変わり様に驚いていたことがよくわかる。

⑤チャペルの鐘「『鐘』のこと」 大島通義氏

「チャペル建設に際して、里見氏はチャペルに鐘を備え付けることを企図し、大阪の生駒時計店社長・生駒権七氏の協力を得て、やがて慶應義塾大学に送られたのがこの鐘である。しかし、おそらく戦時下という当時の状況のため、この鐘はチャペルに備えつけられるにいたらず、一九四五年の敗戦まで大学の倉庫に保管された。そのため、この鐘は当時在学していた青年会の会員達の目に触れることなく、加えて戦後の混乱のなかで遂に行方知れずとなつた。この鐘が或る隣人により慶應義塾に届けられたのは、一九八九年、チャペルの献堂式以来半世紀余を経過したのちのことである。」

「この鐘を、わが国におけるこの運動の発祥の地、東山荘に寄付することにした。」「なお、この鐘の正面には、『シートウットガルト在ハインリヒ=クルツ、キリスト生誕後一九二九年に、これを鋸造せん』と刻まれている。」「この鐘は高さ約四十五センチ、下部直径四十二センチ、重さが五十五キロある。」

⇒チャペルの鐘は「一九九一年秋」紆余曲折を経たのち御殿場の東山荘に設置されている。



東山荘にある
「慶應日吉チャペルの鐘」

⑥近年のチャペル「チャペルの憶い出」 小林富次郎氏

「チャペルは……事実四十数年前に建てられ、荒廃していたのを最近塾当局のご厚意で改修、また椅子も国際文化会館から安く譲って戴き、目下高校事務室の管理下でキリスト教関係の学生諸君に利用されている。」 ⇒米軍の駐留後もチャペルは利用された。しかし経年の劣化により荒廃したが、塾当局の改修等により近年も学生たちに利用してきたことがわかる。

第3報告：大和出撃から見た海軍燃料事情（極限の油断）

運営委員 岡本秀樹

1) 開戦時 海軍の備蓄燃料

474万トン (5,579,000 KL)

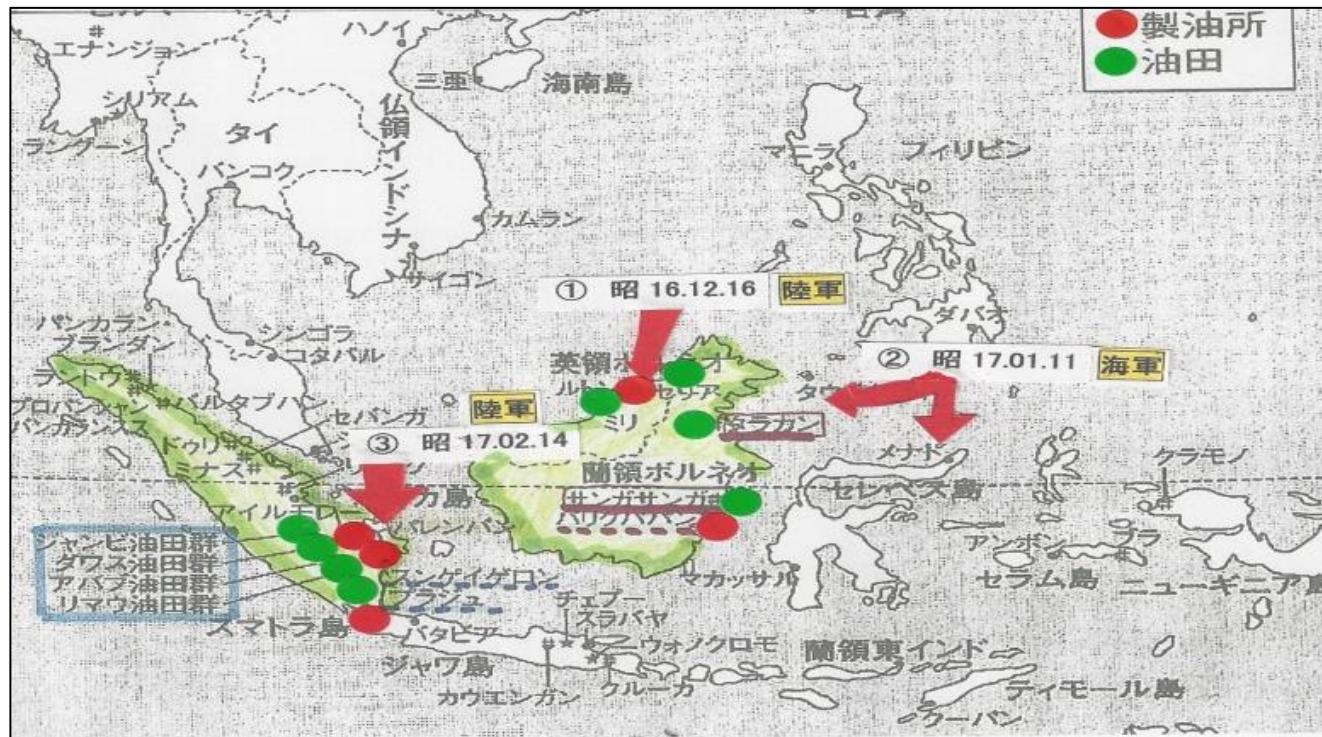
昭和16年、海軍が保有していた国内貯油量						単位：KL
原油	重油	航擣発油	普通擣発油	航空潤滑油	普通潤滑油	合計
1,435,000	3,624,000	473,000	27,000	6,400	13,600	5,579,000
出典：徳山海軍燃料廠史頁 290						

*開戦に臨み想定年間石油消費予測（海軍） 240万トン/年 ⇒計算上 2年で枯渇
石油確保の為 南方油田制圧が急務で 制圧を急いだ

2) 南方油田の制圧 (陸軍の油は陸軍 海軍の油は海軍)

ボルネオ島に1941年12月～1942年1月、陸軍と海軍が、更にスマトラ島に1942年2月陸軍がそれぞれ落下傘部隊(陸戦隊)を投入。開戦から僅か2か月で南方の油田と製油所を制圧した。その維持管理の為、関連技師等7,000人を急遽派遣した。

陸軍が制圧したスマトラ島パレンバンの、ロイヤル・ダッチ・シェル社の製油所だけでも、当時の日本の年間消費量を上まわり、軍上層部はこれで継戦が可能と判断したようだ。



スマトラ島の油田は陸軍が占領。ボルネオ島は陸軍と海軍の分割占領となる。全体の占領比率は、陸軍85対 海軍15で、陸軍の油は陸軍。海軍の油は海軍となり海軍では常に燃料が不足した。更に「生産の主体は陸軍、運搬は海軍」という構図は、その後の確執を生む要因となった。

一方、年間消費予測240万トンは開戦1年目 メートルでみると412万トンにも達し、継戦の為には南方油田からの補給路の確保は最低限の絶対条件だったはずであったが、軍部はその補給海上護衛等には余り力を入れなかった。

*出典：「完敗の太平洋戦争」岩間瓶著

3) オイルロード(南方油路)の寸断

●海軍乙事件(昭和19年3月31日、連合艦隊古賀峰一司令長官遭難死)

連合艦隊司令部(在パラオ)がフィリピンへ避難中、悪天候で遭難。福留参謀長が現地ゲリラに拘束される遭難の際、最高機密文書(Z作戦要領)がゲリラ経由、米軍の手に！ 暗号が漏洩！

●機密漏洩(作戦情報 暗号解読)で 敵の待ち伏せ 先制攻撃 等が頻発した。

物資輸送船やタンカー(石油輸送船)の喪失が急拡大 オイルロードが寸断された。その結果 南方石油の国内への輸送が激減 いよいよ 国内の燃料不足が極まった。

(年度)	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年	計
就航	57.5	62.8	83.4	78.5	24.8*	
建造	0.1	19.7	38.0	55.5	1.0	114.3
喪失	0.1	0.4	38.8	75.4	32.5	147.2

*出典「完敗の太平洋戦争」岩間瓶著

4) 昭和20年4月 海軍燃料備蓄量 2.8万トン(開戦時474万トン)

国内月頭燃料実態「太平洋戦争と石油 三輪宗弘/著 日本経済評論社 2004/1発行」								
年 項目:月	昭和19年(1944)			昭和20年(1945)				
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
原油 (t)	26,428	24,048	18,714	18,435	5,127	3,827	1,285	1,285
缶用重油 (t)	9,514	20,690	31,826	29,579	24,370	26,533	26,413	27,767

● 昭和20年2月 燃料不足深刻化 軍艦の予備役化を決定 戦列離脱させた。
 月間消費量1,200トン(40t/日)以上の艦船
 戦艦 長門(横須賀)、榛名・伊勢・日向(呉) ⇒ 浮砲台
 大型艦空母 天城、阿蘇 建造途中 ⇒ 放棄

5) 昭和20年4月1日 米軍 沖縄本島上陸開始 → 大和“出撃命令”

発信 昭和20年4月5日(第603号電令作)

第一遊撃部隊「大和第二水雷隊(矢矧ヨビ駆逐艦6隻)」ハ海上特攻トシテ八日黎明沖縄突入ヲ
 目途トシ……(中略)……燃料ニツ行大本營戦争指導部/要求ニ基ズク GF 機密電通り
 2,000屯以下トセラレシ

大和出撃命令 発令に際して

- 「海軍にはもう船は艦は無いのか(天皇陛下) ⇒ 付度? (及川軍令部総長)
- 決まってから 参謀長の意見はどうですか……は無いもんだ (草鹿参謀長)
- 航空機援護なき作戦など 最早 作戦とは言えない (伊藤長官)
- 一億総特攻の魁となつて欲しい (草鹿参謀長⇒伊藤長官)
- 作戦継続不能の場合は? (伊藤) ⇒ それは長官の心の中です (草鹿参謀長)
- 司令部は地下壕に籠らず 穴から出てきて一緒に戦つたらどうだ (矢矧艦内で)

6) 大和出撃 昭和20年4月6日

訓示

光輝ある帝國海軍海上部隊の 伝統を発揚 其の栄光を後世に伝えんとす

●大和以下 第二艦隊 10隻 出撃 (艦隊総積載燃量 10,500トン)

翌7日 午後 鹿児島沖 坊の岬にて 大和以下6隻沈没 死者 3721名

この作戦で 海軍は 国内在庫重油の 38% を失い 連合艦隊は壊滅した

●大和特攻への燃料手当の為 戰略物資 (塩、石炭) の 護衛艦の重油も削減。
海上護衛総司令部 参謀 大井篤 大佐が激怒

「国を挙げての戦争に 光輝や伝統や栄光を後世に伝えん・が何だ 馬鹿野郎！」

7) 極限の油断

戦前は石油自給率8%、全体の80%の石油を米国（生産量日本の740倍）からの輸入に頼っていた日本、何を根拠に「軍事・工業の超大国と戦争して生存可能」と考えたのだろうか？

宗主国オランダが ドイツ軍に占領され 政治的空白化した 南方の石油供給源を押さえる事で【自存自衛の体制】の確立は可能であると 判断したようであった。

南方の油田は占領したものの その石油を本土に送るオイルロード（南方石油路）の確保・維持も十分に出来ず、楽観と慢心の果ての「油断」。特に「情報の軽視」

「専門知識の不足」「その場しのぎの対応」など政策決定集団の組織能力に多くの問題があった。

米軍の沖縄本島上陸に 決死の防戦の地上部隊 それを 座視出来ない水上部隊だが、在庫燃料は枯渇、最後の重油一滴までも搔き集めた。大和出撃命令！

海軍の象徴、大和の出撃は「極限の油断」の総括を求められた海軍自体の出撃でもあった。

戦争を情報管理と補給路確保とする米国。一方、戦争とは戦闘、武器の確保と志氣高揚なりとした日本。この戦争観の違いは、この戦争から学ぶ教訓の一つであるかも知れない。

引用・参考資料

- | | | | | |
|----------------------------|-----------|---------|-------|---|
| ● <u>悲壯の海 戦艦大和死闘の記録</u> | (中公文庫) | 戦艦大和副長 | 能村次郎 | 著 |
| ● <u>連合艦隊参謀長の回想</u> | (光和堂) | 連合艦隊参謀長 | 草鹿龍之介 | 著 |
| ● <u>日本海軍の戦略発想</u> | (フレジデント社) | 連合艦隊参謀 | 千原正隆 | 著 |
| ● <u>石油で読み解く「完敗の太平洋戦争」</u> | (朝日新書) | 元石油公団理事 | 岩間 瓶 | 著 |

寄稿

日吉台地下壕ガイド養成講座を受講して

第11期ガイド 岩崎晴樹

昨年10月、保存の会入会と同時にガイドになることを決めていました。私の入会動機は、慶應義塾の卒業生として大学に関わる何かをしたい、そして地域の役に立ちたい、将来へ何かを継承する活動がしたいというこの三つのことが動機でした。それらはガイドをすることにより具体的に、実感を伴って叶えられると思ったからです。

ところが、ガイド養成講座を受講すると、あまりの自分の無知に驚くばかりでした。私が知っていることといえば、それこそアジア太平洋戦争の年表的知識や映画や本で知った知識でしかなく、体験者の話や自分の住んでいる地域の戦争被害などには関心を持たずにきました。毎年8月になるたびに各地で行われる慰霊祭や、NHKの戦争番組もどこかよその所のことだと感じていたのだと、今更ながら気付いたのです。生まれ育った山形庄内でも、住み始めてここ10年ほどになる日吉でも、地域と戦争は結び付きませんでした。でもそれは、今の平均的日本人の姿かもしれません。

1月から5月までのガイド養成講座は、ガイドの解説の文言を教えるのではなく、ガイドをやってみたい、やれそうだという気持ちになることを主眼においているそうです。知識ではなく、興味・関心が湧き立つように計画されています。ですから、その始まりは、最近ガイドを始めた人たちの感想や、川崎中原の空襲の体験者の話、保存の会のメンバーの体験や親から聞いた話など実感のある、ある意味生々しい話を聞くことからスタートします。

講座の中盤には、座学から離れフィールドワークも実施されました。朝10時から昼食をはさんで午後3時半まで慶應義塾日吉キャンパス周辺と、日吉の丘公園周辺のかなりの距離を歩きます。日ごろ運動不足の身としては、ガイドの皆さんのが健脚ぶりについて行くのがやっとでした。

このフィールドワークで印象的だったのは、見学会では地下壕の内側から説明する民家の敷地を訪れた時のことでした。ガイドの説明にある通り、壕を掘るのに出した土砂のせいで敷地が高くなっていて、周辺の道路よりかなり高いところに家屋が建てられていたことでした。それから、その民家の敷地内にある壕では、戦後にまだ兵が潜んでないかと米軍がダイナマイトで爆破したため、ぽっかりと天井に穴が開いており、それを見た時、何か時間を70年引き戻されたような妙な感覚を覚えました。

午後のフィールドワークで印象深かったのは、日吉の丘公園近くの大聖院というお寺の戦災樹木です。1945年4月、5月の空襲でお寺は消失したものの、境内にあった4本の樹木は痛々しい傷を負いながらも生き残り、今も青々とした葉を繁らせています。

それから、ガイド養成講座の合間にはせっせと定例見学会に補助として参加し、先輩ガイドに学びました。とにかく、どれだけ多くの現場に出て慣れるかが大事です。ガイド解説の内容もだんだん頭に残っていきます。ガイドの仕事は説明だけではなく、60人にも及ぶ見学者の誘導と安全に気を配らなければなりません。それらは現場でしか身につかないものです。

養成講座の一環で、慶應義塾の都倉武之准教授による公開講座も受講しました。「大学は戦争の何を『引き継ぐ』のか?—慶應義塾における



ガイドの岩崎晴樹さん

実名と実物の継承の試みー」と題した講演は、学術的にも戦争資料や体験というものの保存と将来への継承が、いかに重要かを認識させられるものでした。こうして、5月20日に同期3名と共に第11期ガイド養成講座を修了いたしました。修了証書と一緒に、この時やっと主要な解説箇所と文言の記載された「ガイドの手引き」を受け取り、欠席すること無く終えられたことにホッとする同時に、これから責任にちょっと緊張を感じました。とにかく無事終えられたのも、ガイド講師の皆さんのお熱意あるご指導のおかげと感謝しております。かくして、ガイド養成講座の主眼とする、興味・関心がドンドン湧き立ったのは言うまでもありません。これからが本番で、次の目標はガイド・デビューです。

最後に、私も入会動機を初心とし、いつまでもその思いを抱きながら地域の歴史や、そこで起きたことをよく研究し、年々失われていく生きた体験談を乗り越えて次世代に継承する方法を模索していくかなければなりません。現代史とはいえ、あまりにも記録が失われ過ぎたこの歴史を知るには、歴史家のE. H. カーが「歴史とは現在と過去との対話である。」(『歴史とは何か』1962年岩波新書) というように、この先戦争を絶対繰り返さないという思いのもとに過去を見つめなおし、今も残っている戦争遺跡が語る声に耳を澄ましながら、平和な現在は不幸な過去の上に築かれていることをもう一度認識しなおすことが重要です。そして、そのことを多くの人々に記憶し、継承してもらわなくてはなりません。そのためにガイドが果たす役割はとても大きなものだと思います。

寄稿

夏休み見学会を終えて 第10期ガイド 田中 剛

私がガイドに加えていただいてから二度目の夏を迎えるました。

今年も夏休み見学会が7月29・31日、8月4・5日に延べ5回開催され、合計166名の参加をいただき、盛況のうちに終了しました。昨年の経験も思い出しながら、また水分確保について先輩から助言をいただいたので、参加者の皆さんに集合時点で事前案内を行い、熱中症での脱落者がおなかつたのは幸いでした。

定例見学会と同様に、生涯学習に熱心とおぼしきご年代の参加者が多い中で、やはり夏休みということもあってか小学生を伴った親子づれや、意外に若い人たちも目に付きました。

案内をする傍らで、お母さんのアドバイスを受けながら熱心にメモを取る小学生の姿には、とても微笑しさを感じました。この世代が地下壕見学をきっかけにして、少しでも戦争の実相に興味を抱いてくれるなら、将来への種蒔きとして意義深さを感じます。

また見学班の後方を担当していた時のこと。若い男女のグループのうち女性二人が入壕直後に「怖い」と呟いたので、すぐに「何かあったら声を掛けてね」とフォローし、仲間の男性も気遣っていました。ところが、よりによって一番奥の民地境の鉄格子の前で「気分が悪くなつた」と申し出があり、慌ててガイドのK氏に壕外への案内サポートを依頼して事無きを得ました。仲間の男性によると「女性は閉所恐怖症」なのだそうで、よく見学会に参加してくれたと感心したり首を傾げたり。お陰で貴重な実践経験ができました。



ガイドの田中剛さん

《連載》地下壕設備アレコレ【19】

第300設営隊は、日吉では「横須賀海軍施設部第一部隊」だった

運営委員 山田譲

日吉の海軍地下壕を築造したのは、第300設営隊、第3010設営隊と柳瀬隊（東京施設事務所編成、鉄道工業㈱が協力作業隊）であると、『海軍施設系技術官の記録』で伊東三郎第3010設営隊元隊長は書いています。そして伊東氏は「既に日吉地区に先行駐屯して、軍令部の待避壕設営に着工しておられた忍者部隊第三〇〇設営隊」と書いています。また同書では第300設営隊元隊長山本将雄氏が、「第三〇〇設営隊は……三〇のついた横鎮（横須賀鎮守府）指揮下にある形はしているが、……番号のない零号とも云うべき甲編成の設営隊で……軍令部総長より特命を以って命名された特別設営隊」と書いています。

他方、同書末尾の設営隊「一覧」では「昭20・1・5編成」となっており、「昭19・7・15横須賀海軍第一部隊編成直後日吉G・F地下作戦室設営」と記されています。「G・F（連合艦隊）地下作戦室」とあるのは、伊東三郎氏が書いていることからすると軍令部第3部待避壕を誤記していると思いますが、この記述からすると第300設営隊は日吉に来た時には未編成となります。これはどういうことでしょうか？

この疑問への答が「第三〇〇設営隊戦時日誌」に書かれていました。この文書は「大東亜戦争 功績調査資料綴 海軍功績調査部」という表書きがつけられた海軍の公文書です。功績調査部への提出日は昭和20年5月15日と7月12日の2回です。これには「本隊は横須賀海軍施設部第一部隊（准甲編成）を改編し昭和二十年三月十五日第三〇〇設営隊として開隊」と書かれていました。したがって、これが正式な部隊名称の変遷ということになります。これは公文書ですので、先の『海軍施設系技術官の記録』の設営隊「一覧」の記事は不正確だったことになりますが、部隊名の変遷を反映していたとは言えるわけです。したがって伊東三郎氏が「日吉地区に先行駐屯……忍者部隊第三〇〇設営隊」と書いていたのは後の名称で書いたということになります。また第3010設営隊の行動記録文書では「山本部隊掘進と合致貫通」と記されており、後の第300設営隊は日吉では「山本部隊」と呼ばれていたわけです。

私たちは見学会で「日吉の地下壕を築造したのは、第300設営隊、第3010設営隊、そして鉄道工業㈱も協力」と説明していますが、厳密に言うと不正確だったことになります。ただ築造した部隊長の一人だった伊東三郎氏の記述にそって説明しているわけなので、これをあえて見直す必要はないと思います。

設営隊の編成と過酷な労働実態

ところで「准甲編成」というのはなんでしょうか？「甲編成」に准ずる編成ということですが、『基地設営戦の全貌』（佐用泰司、森茂著）によれば、甲編成の定員は將兵約1000人、乙編成で約700人、丙編成で約100人、丁編成で約70人です。この「戦時日誌」の5月15日提出文書では將兵総数880人となっています。また「技術兵及工員技能別員数表」というのがあり、これによると「土工員272人、木工員138人、工業員91人、運転員67人、隧道員57人、運輸員27人、内務員36人」、その他を入れて下級兵士は合計767人となっています。この日誌が書かれていたときは、横須賀市追浜付近の野島、夏島の「飛行機格納用大型隧道（約百機分）」を築造中でした。作業内容からして、日吉での地下壕築造の場合も、同様な作業者配分だっただろうとおもいます。

兵器の保有数は、小銃はわずか20挺、なぜか「霰弾銃」（散弾銃）が100挺、機銃が4台、鉄兜はたった50個、そして「代用疊」600枚などとなっています。保有機材で目立つのは、「土運車89台、電動機（モーター）30台、原動機（エンジン）21台、貨物自動車35台、傾倒式貨物自動車（ダンプカー）7台、削岩機26台、穿孔機21台、空気圧縮機（コンプレッサー）9台、捲揚機（クレーン）8台、混合機（コンクリートミキサー）7台、軌条（レール）

5000m」です。工期短縮のために少しでも機械化しようとしていたようですが、「土運車」は手押しの小型トロッコと思われますので、やはり人力頼りです。

「会計経理」では「糧食受入概ね順調なるも生糧品（生野菜）及び調味品の受入状況悪い」と書かれています。「会計 四月支出高 92734 円」です。隊員1人当たり約100円という支出になります。

「医務衛生」では4月の「受療患者表」を見ると、「受療患者総数427人、1日平均24.2人」。その内、「休業6.56人、軽業9.1人、就業8.56人」となっています。1ヶ月の間に隊員の半数が何らかの傷病で受診し、毎日6~7人が就業不能で倒れてしまっていたということです。「人員移動」の所には「病死者 兵二名」（3月15日~4月30日の間）と記され、「4月13日 公病死 兵1」という記載もあります。何があったのでしょうか。地下の悪環境での昼夜2交代重労働の過酷さが、この数字には現れています。

戦跡をめぐるバスツアーのご案内 「三浦半島・観音崎砲台群と横須賀軍港見学」

コース：日吉～横須賀軍港を岸壁・埠頭から見学～昼食（横須賀美術館内
レストラン）～観音崎公園内の火薬庫跡・観音崎砲台群・隧道・弾薬壕・
観音崎灯台などを見学～日吉（解散）

日時：2017年11月26日（日）8:00～17:30（予定）

集合：7:45 慶應義塾大学日吉キャンパス警備室前、出発8:00

参加費：¥5,000（交通費・資料代・保険料など）※当日集金。昼食代は各自負担。

服装・持ち物：懐中電灯、歩きやすい靴と服。天気が不安定な時は雨具。

定員：25名（先着順）

問い合わせ・申し込み先：亀岡敦子（TEL/FAX 045-561-2758）



火薬庫跡（現在は観音崎公園パークセンター）



観音崎砲台、北門第一砲台

第12期（2018年度）日吉のガイド養成講座のご案内

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

毎年2000名余りの見学者が訪れる戦争の遺跡・日吉台地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨な戦争をくりかえさないために活用してゆくにはガイド活動が不可欠です。物言わぬ遺跡にガイドの案内を加えて歴史を語ってもらいます。この活動をいっしょにやってみませんか？

講座回数：4回

日程：2018.1.13（土）、3.10（土）、4.7（土）、5.12（土）

時間：いずれも、13時～15時半（4.7のみ16時半迄の予定）

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎会議室

定員：30名（高校生以上）

参加費：¥2,000（全4回分）

申し込み先：ハガキ又はFAXにて、下記「ガイド養成講座」係まで。

〒223-0064 横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443（午前・夜間）

主催：日吉台地下壕保存の会

後援：港北区役所 ☆この企画は地域のチカラ応援事業の助成を受けています。



9/13 第一校舎前説明（高校前の彼岸花）

報告

今年も港北図書館にて、パネル展示会(7/31~8/27)及び講演会(8/6)を開催しました。地元の方々を始めとして大勢の方々に来場いただき、講演会では40名の参加者があり、1時間の講演後も沢山の質問をいただきました。8/18にはTVK「お昼のニュース」「ニュース930α」でも展示会の様子が放映され、地下壕への関心の高まりを実感しています。

運営委員 小山信雄

身近な戦争遺跡知って

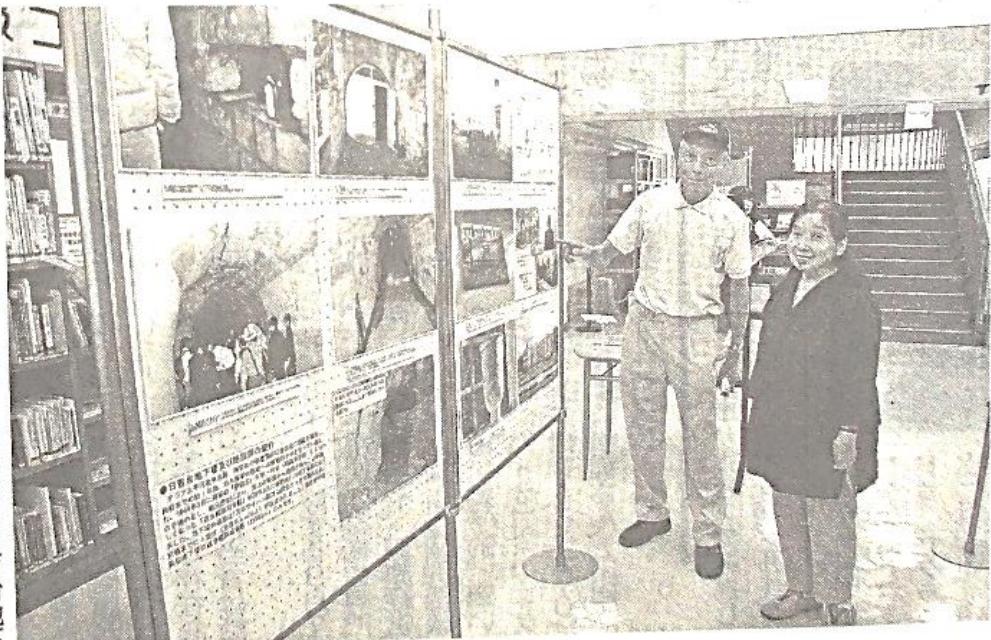
神奈川新聞 2017.8.15(火)

慶應大日吉キヤンパス地下壕

継承
戦後72年の夏

太平洋戦争末期、旧日本海軍の連合艦隊司令部が置かれた慶應大日吉キャンパス(横浜市港北区)の地下壕を紹介するパネル展が同区の市港北図書館で開かれている。主催者は「戦争遺跡を多くの人に知ってほしい」と話している。会期中には展示解説もある。(吉田 太一)

27日まで 港北図書館でパネル展



写真には「約30台の短波受信機が備えられ、100人を超える隊員が交代で受信に当たっていた」といった説明もある。34年に誕生した同キャンパスの戦時下の歴史などを紹介。軍事教練で行進する学生や陸上競技場で行われた報国隊結成式の写真もある。

同会は月2回、定例見学

会を実施するほか、ガイド

養成講座を開催。副会長の

亀岡敦子さん(70)は、「戦争と平和の問題を

考えることができる貴重な

戦争遺跡。戦争体験者が減

る中、埋もれそうな歴史を

掘り起こし、伝え続けてい

きたい」と話す。

4時には佐藤さんらが随

時、パネル写真の解説をす

る。申し込み不要。21日は

211。

書館☎045(421)1

い」と来場を呼び掛ける。パネルは約40枚で、地下壕の配置図ほか、見学会の内情や同会の活動を紹介している。キャンパス周辺の中心部に造られた電信室の

現地の見学会にも来てほしい

日吉台地下壕保存の会の佐藤宗達さん(68)は、「あまり知られていない地下壕の存在を知って、現地の見学会にも来てほしい

」と来場を呼び掛ける。

パネルなどがある。地下壕の配置図ほか、見学会の内情や同会の活動を紹介している。キャンパス周辺の中心部に造られた電信室の

現地の見学会にも来てほしい

」と来場を呼び掛けた。

パネルは約40枚で、地下壕の配置図ほか、見学会の内情や同会の活動を紹介している。キャンパス周辺の中心部に造られた電信室の

現地の見学会にも来てほしい

」と来場を呼び掛けた。

お知らせ**第25回横浜・川崎平和のための戦争展2017 実施要項****1、趣旨および経緯**

敗戦から40年経った1980年代半ばから、戦争遺跡保存運動があちこちで始まりました。古いものに価値を置かない高度成長期の風潮に、戦争の影を払拭したい心理が重なり、すでに戦争遺跡の多くが破壊されたと言われています。その反省に立ち地域の研究者と市民によって、保存運動が始まりました。日吉台地下壕も登戸研究所も、やはりその頃から調査研究と見学案内が盛んになりました。そして、ひとりでも多くの人に知つてもらうために、保存を求める人たちが一緒に「平和のための戦争展」を横浜と川崎で交互開催することにしました。25年前のことです。糸余曲折はありましたが、新しい仲間も増えてきました。内容は一貫して「展示」と「若者の発表」と「講演やシンポジウム」が柱です。

戦争遺跡はモノに過ぎないかもしれません、その歴史を伝えることにより、観る人には何かを語りはじめるのです。ささやかな活動かもしれません、目の前のひとりを大事にして、地道な活動をこれからも気負うことなく継続してまいります。

2、テーマ 『平和のために 今こそ戦争遺跡を考える』**3、主 催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会**

後 援 横浜市港北区役所（予定）

実施団体 日吉台地下壕保存の会／登戸研究所保存の会／川崎中原の空襲・戦災
を記録する会／みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

4、代 表 阿久沢武史 日吉台地下壕保存の会

副代表 姫田光義 登戸研究所保存の会

実行委員 主催団体より実行委員を選び企画運営にあたる

5、開催日程 2017年12月2日（土）～3日（日）9：00～17：00**6、会 場 慶應義塾日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース・イベントテラス**
入場無料 事前予約不要**7、☆展示 来往舎イベントテラス 12月2, 3日 9：00～17：00**

実施団体による写真パネル・実物資料・市民の描いた戦争体験絵画

☆若者の発表 来往舎シンポジウムスペース 12月3日（日）10：00～12：00
高校生・大学生による戦争遺跡関連の研究発表

☆講演会 来往舎シンポジウムスペース 12月3日（日）13：00～16：00

演題 「一年中8月ジャーナリズム
～国家に戦争を始めさせないために～

講師 粟原俊雄氏（毎日新聞学芸部記者）

☆日吉キャンパスマーチ 12月2日（土）開始13時・15時（約1時間地上のみ見学）
参加希望者は来往舎集合・参加費無料・予約不要・ガイドによる案内つき

8、事務担当 亀岡敦子（045-561-2758）森田忠正（044-911-2726）江連恭弘

活動の記録 2017年6月～10月

- 6／24(土) 定例見学会 28名
 6／28(水) 会報131号発送(来往舎205号室)
 6／30(金) 地下壕見学会 慶應志木高校3年生 193名 先生 3名(午前午後実施)
 7／1(土) ガイド学習会(中原市民館)
 7／8(土) 拡大ガイド学習会(来往舎会議室)
 7／10(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 7／12(水) 定例見学会 34名(小学生1名・中学生1名・高校生2名)
 7／22(土) 定例見学会 57名(高校生1名)
 7／29(土) 夏休み見学会 56名(小学生3名・神奈川学園中学校30名)
 7／30(日) 港北図書館パネル展示 設営(展示期間7／31～8／27)
 7／31(月) 夏休み見学会 5名
 8／4(金) 夏休み見学会 31名(カリタス学園中・高生21名)
 8／5(土) 夏休み見学会 午前13名・午後61名(小学生1名・中学生1名)
 8／6(日) 講演会「日吉台地下壕」 港北図書館会議室
 8／8(火) 地下壕見学会 神奈川学園中学校36名
 8／9(水) 定例見学会 35名(小学生6名・中学生7名)
 8／13(日) 港北図書館展示 ミニレクチャー
 8／19(土)～21(月) 第21回戦争遺跡保存全国ネットワーク高知大会(高知県民文化ホール)
 8／27(日) 港北図書館展示 ミニレクチャー・展示撤収 保存の会から6名参加
 9／2(土) ガイド学習会(菊名フラット)
 9／4(月) 運営委員会(来往舎205号室)
 9／13(水) 定例見学会 34名(港北区役所研修他)
 9／16(土) 「地底研究会」聞き取り(慶應高校) 「地底研究会」は1969年慶應高校在学中に地下壕の調査を行い文化祭で発表、1971年に日吉台地下壕初の調査記録『わが足の下』を作成。阿久澤会長、塾高生2名の聞き取りに保存の会2名も参加。3名の方は約50年ぶりに高校生の案内で地下壕へ
 9／20(水) 地下壕見学会 綱島東小学校6年生90名・先生5名
 平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 9／25(月) 慶應義塾高校地下壕見学会(月1回実施) 25名
 9／27(水) 地下壕見学会 横浜デフネットワーク 16名
 9／30(土) 定例見学会 52名
 10／3(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 10／11(水) 定例見学会 57名

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です

原則として毎月2回実施(第2水曜日10時～・第4土曜日13時～ 所要時間2時間半)

○都合により変更する場合もあります ○年内はほとんど定員(60名)に達しています

申込、お問い合わせは見学会窓口まで

TEL・FAX 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久澤 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会